



国境なき医師団報告書

2003年7月25日

イトゥリ：破られた約束 見せかけの保護と不十分な援助



目次

序章	P3
イトゥリ地方における MSF の活動	P5
第 1 章 暫定多国籍軍の強化：破られた約束	
第 1 節 ブニア：包囲された街の治安は回復されず	P6
第 2 節 「アルテミス」作戦の外に置かれた 15 万のブニア住民	P7
第 3 節 ベニ：危険な避難場所	P9
第 2 章 MONUC 派遣下の戦争	
第 1 節 市街戦から計画的な虐殺まで	P10
1 戦闘と広がる恐怖	
2 「これは、私たちの戦いではない……。」	
3 市内を無人化するために展開された巧妙な恐怖作戦	
第 2 節 ブニアに安全はない	P13
第 3 節 ブニアからの避難- MONUC の支援はないまま	P14
1 ブニアから 14km 離れたチャイでの攻撃	
2 チェックポイントでの選別作戦	
3 恐喝	
4 森を通過して避難	
第 3 章 不十分な援助	
第 1 節 ブニア：「帰還者」は後回し	P18
第 2 節 ブニアの周辺：援助から忘れ去られた地域	P19
第 3 節 ベニ：何ヶ月も予測に失敗した結果	P19
結論	P21
付録：コンゴ紛争と国際社会	P22
地図	P23

序章

今年5月、コンゴ民主共和国(以下、コンゴ)北東部イトゥリ(Ituri)地方の主要都市、ブニア(Benia)は激しい戦闘の舞台となった。この地方の紛争は1998年から続いているのだが、2年前からはその激しさを極度に増しており、何千人もが殺害され、数十万人が幾度にもわたり避難を繰り返すという事態に発展している。

2001年4月にブニア近郊で赤十字国際委員会(ICRC)のメンバー6人が殺害されたことから、一般市民や援助活動従事者さえも攻撃の対象となっていることがわかる。

国境なき医師団(MSF)は、1988年からコンゴで活動しており、1999年からは断続的にイトゥリ地方の人々のもとで活動してきた。この数ヵ月、現地のMSFチームは病人や戦争による負傷者を治療するなかで、国際人道法が保障する権利を激しく侵害されている彼らの声に耳を傾けてきた。

現行の武力衝突は、ヘマ人とレンドゥ人との「部族抗争」に要約されるというのがもっとも一般的な解釈である。以前からこの地域で民族主義的イデオロギーが称揚されてきたこと、そのためにさまざまな手段が用いられてきたことは事実である。しかしながら部族抗争が故意に掻き立てられてきたこともまた明らかである。直接・間接的な近隣諸国の関与、また複数の武装勢力からの支援によって煽られて、この紛争は多々の介入を引き起こしてきたのであり、「部族抗争」という解釈は政治的優位や天然資源をめぐる競争という側面を覆い隠してしまう。

被害者と援助活動従事者の声から、この地方全体を巻き込む暴力の広がりが明らかになる。この武力衝突は、単なる部族抗争で片付けられるものではない。人々の言葉から、地域的・部族的帰属にかかわらず、すべての人が恐怖を抱えており、その恐怖ゆえにすべての暴力行為が正当化されかねないという状況を読み取ることができる。

この戦争は、さまざまな勢力間の衝突と市民に対する犯罪の舞台となっているブニアから、人々が不安定な避難生活を送るベニ(Beni)、さらには6月初旬に紛争が勃発したルベロ(Lubero)までの広い地域で、全住民を恐怖に陥れている。今日または明日にも、誰もが戦闘の真っ只中に巻き込まれ、武装勢力の容赦ない攻撃の対象となり、自らの家を追われ、避難生活を生き抜くことを余儀なくされる可能性があるのだ。

2003年4月、国連コンゴ民主共和国ミッション(MONUC)の兵士600人がこの地域に派遣され、6月には欧州連合(EU)の指揮のもと、1500人の「暫定緊急多国籍軍」が展開された。しかし我々は、ブニア住民の安全に対する脅威はずっと以前から認識されていたにもかかわらず、今になってようやくこれらの対策が取られたという事実を忘れてはならない。実際、これらの部隊の到着は何万という人々にとっては遅すぎた。2003年5月初旬の2週間の戦闘だけで、何百人もの人々が殺害され、何万という人々がブニアから避難することを余儀なくされた。さらに数万人の行方は未だにわかっておらず、ブニアに残った住民は一日一日を極度に不安定な環境の下で生き延びている。

MONUCの強化部隊とEUの暫定緊急軍が展開されたにもかかわらず、この軍事的プレゼンスの強化により市民の保護が確実に became と言いはない。これらの部隊は、多大な努力を払ってやっと安全が確保された、市内のごく一部の地域においてのみ、どうにか市民に安全を保障していると指摘せざるを得ない。その上、国際社会や国連機関の物資面での緊急援助への関わりは、現在も不十分である。

国連安全保障理事会は、コンゴに対するこの先数ヶ月間の国際社会の関わりについての大枠を決める時期を迎えているが、MSFは、先ごろ派遣された部隊がイトゥリ地方の住民の本当の意味での保護に失敗していること、この地域における援助も不十分であるということを強調したい。

イトゥリ地方における MSF の活動

MSF は、コンゴ政府支配地域では 1988 年から、反政府勢力の支配地域では 1998 年から活動している。

1999 年に開始されたイトゥリ地方での活動は断続的に続けられていたが、MSF は 2002 年 11 月に常駐チームを置いての活動を再開した。2003 年 1 月、2 ヶ月間にわたった戦闘と略奪の後、住民が自宅に戻ったことに伴い、MSF はマンガナ(Mangina)周辺地域では保健センターを、マンバサ(Mambasa)においては 70 人収容の病院を再開した。

4 月、治安は悪化していたが、一般医療・外科医療チームがブニアでの本格的な活動をはじめた。当初このチームは中央病院で活動していたが、5 月の最初の週末に起こった武力衝突とそれに伴う大半の医療従事者の退去を受け、数日間の避難を強いられた。5 月 15 日、活動再開のため、第 2 回目の医療チームが派遣された。仮の手術室が急遽設置され、チームは負傷者の治療を行うことができた。続いて 70 人収容の病院が、ボン・マルシェと呼ばれる以前倉庫として使われていた建物に開設された。

MSF のボランティアは、この仮設のボン・マルシェ病院で、ブニアに残った数千人の住民に何とか医療を提供することができた。住民のほとんどは MONUC の駐留地周辺に集まり、劣悪な衛生環境のなかで生活していた。それ以来、520 件を超える手術が行われた。毎日平均 150 件の外来の診察があり、毎週平均 60 人が入院している。最初のコレラ患者が確認されたことを受け、流行の拡大を防ぐためコレラ治療センターが至急設置された。6 月以降は、住民の栄養状態が悪化し、現存の食糧提供システムでは対処できなくなってきた。そのため、最も深刻な栄養失調の患者を受け入れる集中栄養治療センターが設営されている。また 5 月 19 日以来、チームはブニアの南、約 150 キロにあるベニ近郊でブニアから避難してきた 5 万 5 千人の傍で活動している。

ベニではそのうち 6 千人を収容するため、2 つの避難民キャンプが設営されており、MSF はそこでの医療提供、避難所の建設、給水設備の設置を担当している。オイシャ(Oysha)にあるもう一つの 5 千人収容のキャンプにも、保健ポストが設営された。これから 3 ヶ月間、深刻な栄養失調を防ぐため、5 歳以下の子ども 1 万 7 千人に対し、食糧提供が行われることになっている。

第1章 援軍としての暫定緊急多国籍軍：破られた約束

国連安保理は、MONUC がイトゥリ地方の住民を保護できていないことを受け、2003年5月30日の国連決議第1484号により、「暫定緊急多国籍軍」をブニアへ2003年9月1日まで派遣することを決定した。

6月11日以降 EU の指揮下で、この「アルテミス」と呼ばれる作戦により兵士1500人が配備されているにもかかわらず、ブニアと周辺地域の住民は、本当の意味での保護を全く受けていない。

しかしながら彼らは、1ヵ月以上もの間街の治安を維持できず、住民の安全の保障もできていない MONUC 部隊の援軍として派遣されたはずである。

第1節 ブニア-包囲された街の治安は回復されず

暫定緊急軍の最重要課題は、9月に MONUC の部隊を追加派遣できるよう街の治安を回復し、住民を保護することであった。

約2ヵ月が経過し一部の地区の安全は一時的に回復されたが、街に残った住民の多くや、危険を冒して避難先から戻ってきた人々の日常生活は危険と隣あわせのままである。部隊が派遣されたにもかかわらず、戦争は常に身近にある。夜になると、武装グループはいくつかの地区に侵入し、略奪、殺害をはたらき、住民を恐怖に陥れている。憎しみを煽る人々は、殺害を呼びかけるメッセージを流し続けている。

MSF の設営したボン・マルシェ病院での外科治療活動から、相変わらず政情不安と住民の保護の欠如が続いていることがわかる。6月以来、病院を訪れる戦闘による負傷者は跡をたたない。患者の60パーセント近くは、整形外科手術を必要としている。腹部の傷の場合、緊急に外科治療を施す必要があるが、負傷者が病院に到着したときには手遅れであることが多い。8件の強姦被害者の治療も行われたが、チームはさらに多くの被害報告を受けている。

6月下旬以降、5月の激しい戦闘により避難していたブニアの住民が、小さなグループ単位で帰還を始めた。なかには、森の中で生き延びることを2ヵ月以上も余儀なくされていた人もいた。MSF の病院に収容された患者の健康状態から、避難生活のあいだの過酷な生活条件がわかる。特に子どもたちの間で深刻な栄養失調が見られた。戦闘により負傷してから、手当を受けることなく数週間が経過し、ようやく治療を受けられた人もいた。

土地の民兵が設置した検問所を通るのに必要な金を持っていなかったため、さらに南へ逃げる
ことができなかった人もいた。しかし、街に帰ってきた理由が何であれ、もともと住んでいた家や
地区に戻ることを選ぶ人はほとんどいなかった。彼らは、特に夜間に未だ広く行われている略式
処刑や報復を恐れていた。

これらの「帰還民」のほとんどが、5月下旬に MONUC の駐留地近くに設営された仮設キャンプ
に身を落ち着けている。街から避難せず、日中はブニアで仕事などを行っている住民も、夜間はこ
れらのキャンプで過ごす。しかしながら、キャンプでも人々は襲撃や虐待から保護されていると
いうわけではなく、キャンプから人が失踪したという報告も常にされている。

総合的に見て、ブニアの治安は極めて不安定である。それにもかかわらず MONUC は、ラジオ・
オカピで、治安が回復したことを保証し、避難民に街に戻るよう促すメッセージを流し続けてい
る。このような放送は、住民に治安に関して誤った認識を抱かせる危険性がある。

2003年6月7日付けMSF報告書より

1週間前、4人の子供や孫を連れて53歳の女性が、5月12日から避難していたメドゥ(Medu)から
「一時滞在所」に到着した。家族の他の9人はオイシャへ向かったが、その後の消息はわかって
いない。彼女はまず、もと住んでいた200軒ほどの集落にある自宅に戻ったが、自宅は略奪にあ
っていた。彼女は次のように話す。「初日の夜、ドアをたたいた人間がいました。私たちはドア
を開かないようにしました。彼らは立ち去りましたが、その夜私たちは眠ることができませ
んでした。それで翌朝、私たちはキャンプにやってきました。」

第2節 「アルテミス」作戦の外に置かれた15万のブニア住民

暫定緊急軍の任務はブニアの住民を保護することであるが、権限が限られているため、市外で活
動することはできない。ところがブニアの住民の半数が避難を目的に郊外に残っており、そのた
め彼らは現在のところ、国際的な保護の範囲外に置かれている。

15万人もの人がブニア周辺地域に避難したと考えられているが、そこでは今も暴力行為や武力
衝突が勃発し、村の襲撃、家の略奪、放火、殺害などが頻発している。例えば、カトコ(Katoto)
の村は数回にわたって襲撃を受け、そこに避難していた人々は、いかなる保護を受けることもな
く村に取り残されてしまった。なんとか逃げ出すことができた人々は、不安定さと恐怖に満ちた

日々の生活について語る。

武力衝突が生じ安全が保障されないため、MSF チームは 5 月以降、ブニアから 3km 以上 50km 以内の範囲に位置する村落に住む人々を支援することができずにいる。しかしこの地域の人々こそが、もっとも危険にさらされているのである。

MSF チームの証言

カトコ（ブニアから北東に 25 キロ）の住民がつい先頃空港キャンプに到着した。彼らは最初の夜をブニア市内のセントラル地区で過ごしたが、夜間に略奪が行われるため、たいへんな恐怖を感じた。カトコは 6 月 21 日土曜日に最初の襲撃を受けていた。翌週の金曜日（6 月 27 日）武装グループが再びやってきて残っていた小屋や家を焼き払い、多くの死者が出た。避難した人々は、村へ帰ることを望んでいない。「あそこに残ることは不可能です。いつ殺されるか分からないんですから。」

午後 1 時、年老いた母親を背負った年輩の女性がレンガボ(Lengabo)から到着した。二人は朝の 6 時から歩き続けてきたのだという。彼女らはブニアの北にあるムバレ(M'Bale)の出身で、5 月に町を離れた。彼女らの村は、「敵」と誤認される可能性のある地域にあったが、もはや失うものなどなかった。この数週間の避難生活は、悲惨なものであった。

メドゥとブニアの間に位置する村、ティンダ・ズンドゥ(Tinda Zundu)から、一人の男性が妻と、赤ん坊を連れた 21 歳の娘とともにやってきた。若い女性は木製の椅子に乘せられており、前腕と足に弾傷を負っていた。3 日前、食べ物もらいに 2 人の女の子とマカボ(Makabo)に住む叔母の家を訪れていたときに武装グループに遭遇してその傷を受けたのだ。他の二人は、何とか逃げたが「彼女は武装グループと戦い、傷を負ったのだ。」その場で応急措置を済ませ、我々は彼女をボン・マルシェ病院に搬送した。MSF の外科医は、こんなにひどい傷を見たことがないと言った。医師は彼女の回復の見込みについてコメントしなかったが、切断しなければならないかもしれない。

第3節 ベニ：危険な避難場所

ブニアに暫定緊急軍が展開されたとき、ベニの南では「RCD(コンゴ民主連合) - ゴマ」とコンゴ政府軍の間に重火器による戦闘が生じており、いくつもの村に飛び火していた。ビング(Bingi)で始まった戦闘は、カニャバヤンガ(Kanyabayanga)、そしてルベロへと広がり、現在、これらの街にはほとんど誰もいない。

「カセグ(Kaseghe)からキツアンビロ(Kitsambiro)にかけての村々には、実質誰もいません。民家や公共の建物のドアは開いたままになっています。人々は持てるものだけ持って逃げ、残りは略奪されてしまったようです。いつもは交通量の多い道なのですが、荷物を運ぶトラックが4台通るのを見ただけです。」とMSFチームのメンバーは語った。

ベニには5万5千人のブニア住民が最悪の事態を逃れることができたと考えて避難しているが、戦闘はベニの街に迫っている。ベニとその周辺には、ブニアからの避難民に加えて、イトゥリ、キヴ州、マニエマ州から逃れてきた少なくとも3万人がここ半年以上にわたって生活している。先日の戦闘から逃げたカニャバヤンガからルベロにかけての人々が近くこれに加われば、避難民の数はさらに増えるだろう。

今日、イトゥリ地方南部では少なくとも25万人もの人々が行き場もなくさまよっているが、国連の諸部隊は、彼らの安全確保にまったく貢献できていない。

第2章 MONUC 派遣下の戦争

援軍として暫定緊急多国籍軍が到着した後も依然情勢は不安定だが、MONUC が配備された 5 月から 6 月頃より、紛争は新たな苛烈さを帯び始めていた。

4 月、ウガンダ政府軍のコンゴからの撤退にあたり、ここ数年地域制圧を狙っていた武装グループ間の抗争が再燃し、戦闘が市内に及ぶのではないかと懸念された。そのため MSF は同月、国連に対し、ウガンダ軍が撤退する期間及び撤退後、住民の安全を確保するため具体策をとるよう要請した。

結局 MONUC 部隊の 600 名が配備されたなかで戦闘が始まってしまった。同部隊は緊急派遣されたものの、日々繰り返され拡大していく暴力行為や犯罪、略奪を約 1 ヶ月もの間抑止できなかった。

第1節 市街戦から計画的な虐待まで

ウガンダ政府軍の撤退後、ブニア住民は暴力行為が激化するのを予想していたが、これほどまでの規模になり、全住民にまで及ぶことになるとはほとんどの人が考えていなかった。MONUC 部隊は、虐殺を止めることも住民に対する衝撃を和らげることもできなかった。同部隊がその義務を遂行しようとしても、戦闘は激化の一途をたどるばかりだった。

1 戦闘と広がる恐怖

2003 年 5 月の第 1 週、紛争の火蓋が切って落とされた。最初に郊外が重火器で攻撃された。ブニア住民は数日間自宅に身を隠して過ごした。市内では昼夜を問わず爆音が響き渡った。それから銃や斧による襲撃、民家一軒一軒への押し入り、一般市民の殺害、略奪が横行した。

「私たちは自宅に籠っていたので、スキカ(Sukisa)、ニア・ニア(Nia-nia)、サロンゴ(Salongo)、Sous-region 地区の住民や 200 世帯もの近隣住民が既に町から出ていったとは知りませんでした。私たちが逃げる決心をしたのは、月曜日に攻撃を受けてからです。土曜日の午後 5 時に銃撃や重火器による砲撃が始まり、翌朝 6 時まで一晩中続きました。静かになってから、確認のため外に出てみましたが、午前 11 時頃、市内に残ることは危険すぎると感じました。人々は逃げまどい、中には耳を削ぎ落とされている者もいました。私たちは自宅に留まりましたが、しばらくして避難できるよう手を差し伸べてくれる人がいました。その人は戦闘員で、私の古くからの友人でし

た。彼は、他の友人らに気付かれぬよう夜中にこっそり助けてくれました。」¹

5月5日月曜日、コンゴ愛国者連合(UPC)がブニアを制圧した。レンドウ人民兵との戦いは1週間に及んだ。住民は近隣の地区や家族や友人の家に避難し、その界限には住民がいなくなった。そして殺戮や虐殺が始まった。

「今週のはじめ(5月5日)から明らかに雰囲気が変わりました。変化をはっきり感じ取れるほどでした。略奪や混乱、そして重火器の砲声。人々は逮捕され、殺害された者はその場で埋められました。所かまわず人が殺されたのです。5月6日から12日までの間、約20体もの死体を見ました。」

「月曜日に発砲が聞こえました。市場にはほとんど近づけませんでした。食べ物もほとんど残っていませんでしたが、私たちは1週間自宅に留まりました。そして土曜日、情勢が非常に悪化したため、ブニアを離れました。民兵が近くまで迫ってきており、シテ(Cite)地区で人を殺していると聞きました。大きな発砲が聞こえた後、人々が逃げ出すのが見えました。」

「民兵が街を制圧した後も殺戮は続きました。朝、ある場所で死体10体が見つかったと聞き、被害者に親戚が含まれていないか確認しに行きました。先月亡くなった友人や親戚の正確な人数は把握していませんが、多くの人々が命を落としました。」

虐待や略奪は倍増し、市内は恐怖に包まれた。

「ある晩、ムジペラ(Muzipela)に暮らす兄が、私たちも逃げた方がいいと伝えに来ました。彼が住む地区では、斧で人々が次々に殺されていました。翌朝、銃弾の鋭い音が聞こえ、私たちも逃げ出しました。」

「5月7日か8日に始まりました。週の初め頃、私の父がナイフで殺されました。父は高齢のため避難せず、自宅に閉じこもっていたのです。父が殺害された後に避難した隣人からそのことを知らされました。」

¹ この章で引用されている証言は、ベニに避難したブニアの住民に対し、5月末から6月初めにかけてMSFが調査を行った際に集められたものである。

「ブニアでは、私たちが避難した日(5月11日)の1週間前から略奪が始まりました。彼らは略奪のために民家に押入りました。反抗しようものなら殺されました。」

2 「これは、私たちの戦いではない...。」

これまでヘマ人及び レンドゥ人社会 のいずれにも属さないブニア住民は、彼らが「他人の戦争」と呼ぶものから本当の意味で脅威を感じることはなかった。彼らは次々交代する支配者との個人的・経済的衝突を起こさないよう気をつけながら、どうにか「Vita Kikabila(部族抗争)」とは距離を保つことができていた。

しかし今回はすべての人々に「無差別に」暴力が及んだ。全ての人々に影響が及ぶほど、この紛争はこれまでになく激化したのである。

「私はブニアから逃げたことはありませんでした。これまでは、昼夜戦闘が続いているときも、私たちは家に閉じこもっていました。民兵の死者は出ていましたが、レンドゥ人、ヘマ人以外の一般市民は攻撃されたことはありませんでした。」

「この部族間対立は随分前からありましたが、全部族に対する今回のような暴力は初めてです。ラジオによれば、この土地の出身でない者(Jajambo)は全員殺すということです。」

「悲惨でした。昔からよく知った隣人が人を殺し始め、避難を余儀なくされました。」

「紛争のためにブニアを離れたのは初めてです。今回の紛争は恐ろしかった。もうブニアへは戻りたくありません。危険すぎるからです。あまりにも酷すぎます。」

3 市内を無人化するために展開された巧妙な恐怖作戦

暴力行為は不特定多数に向けられた。目撃者や被害者の証言からそれがどのように行われたのかわかる。戦闘員や民兵はテロリストと化した。民家一軒一軒を襲撃し(武装兵士がドアを開けさせるため住人を騙すことも度々あった)、家族全員もしくは一部の者を残りの家族の目の前で殺害、あるいは手足などの切断や拷問を行った。そして、憎しみを助長し、殺害に駆り立てるメッセージを住民の間にまき散らした。

紛争当事者は戦闘及び虐殺を正当化させるため、人々の苦しみにつけ込んだ。中立でいることは不可能であり、自分の身を守るにはいずれかの勢力につくしかなかった。

「彼らは全ての家にやって来ました。私の家だけ免れたのは、幸運だったからでしょうか？まさに幸運か不運かにかかっています。しかし多くの人々が不運だったのです。」

「彼らは、夫の喉もとを切り裂き殺害しました。彼らは私たちの敷地内に入って来ました。私が命拾いしたのは、夫が殺されたとき私は寝室にいたからです。物音がしたので様子を見てみましたが、寝室へ引き返し、窓から逃げました。窓の外は花壇だったので、そこに身を伏せ、しばらく花に埋れたまま震えていました。立ち上がってみると夫の遺体が目に入りました。家の中にいた娘たちの夫二人の姿は見当たりませんでした。彼らが連行されたのか、逃げたのかは分かりません。ブニアに留まることはできませんでした。人々は、ただ人を殺したいのです。」

戦闘や殺戮の後、遺体は見せしめのため人目につくよう放置された。

「家の裏で死体を2体見つけました。木曜日から土曜日にかけて、市場には更に多くの死体がありました。」

「私たちが逃げた朝、自宅前に死体が5体ありました。埋葬している間にその場で自分も殺されるので、誰も何もできませんでした。赤十字ですら手も足も出なかったのです。」

「家の庭には死体が3体ありました。いずれも両手や頭部、そして耳が切り取られていました。とても怖くて、もはやブニアに残る必要もありませんでしたが、逃げることもできませんでした。この怒りに恐怖を覚えました。怒りにかられて、人々は死体を切断してしまっただけです。」

第2節 ブニアに安全はない

5月初旬、ブニア住民は市内から離れて保護を求め、MONUC 駐留地とそれに隣接する地区へ向かった。住民らはその後戦闘が長引き、避難しなければならなくなることは予想していなかった。

MONUC 駐留地では、自宅にいるのと同じ程度の安全しか確保されなかった。MONUC 部隊は暴力の再燃を傍観し、国連事務総長やマスコミに対し日々の状況を報告するだけだった。MONUC 兵士の監視下でさえ、基地内に民兵が侵入し、避難民を連れ去っていく始末だった。MONUC の派遣は情勢の急激な悪化に伴い決定されたが、戦闘に巻き込まれた 20 万の住民がいる街で、600 人の兵士が秩序と安全を維持することの限界が次第に明らかになっていった。

「ブニアで戦闘が始まった時、私たちはMONUCの駐留地に1日身を隠しました。その日は土曜日で、常に危険な状態でした。MONUC兵は何もせず、ただ傍観するばかりでした。MONUC駐留地に民兵が侵入し、殺害目的で男性一人が連れ去られるのを目撃しました。」(注：この証言者は、連れ去られた男性が殺害される場面は見ていない。)

「私たちはMONUCへ行きたくはありませんでした。私の義理の妹とその3人の子どもは、そこで連れ去られたのです。私の妻は残りの子どもたちを探すため、(途中で止められないように)発狂したふりをして通して貰いました。そして、彼らを連れ戻したのです。」

第3節 ブニアからの避難 – MONUCの支援はないまま

ブニア住民、特に市内中心部の住民は、数年もの間紛争と隣り合わせで暮らしてきた。彼らにとってこの紛争は、散発的に生じる暴力行為と同義であった。しかし今回はあまりにも戦闘が苛烈だったため、多くの者が避難した。

わずか数日の間に住民3分の2以上が市内から脱出した。MSFのボランティアは2週間続いた戦闘の後の市内の様子を「略奪された家しか存在しないゴーストタウンだ」と語っている。

「今回ぎりぎりまで残っていた住民も避難しました。あまりにも苦しかったため、絶対避難しないといていた人々までが逃げ出したのです。」

MONUCは住民の避難を予測することも、安全に避難させることもできなかった。戦闘地域に暮らす住民をより安全な場所へ脱出あるいは搬送するための措置が取られることは一切なかった。

「ブニアを離れここへたどり着けたのは神のおかげです。多くの人々は到達できなかったのですから。」(ベニに避難したブニア住民)

住民は避難する中で無差別殺人や所持品の組織的な略奪などの危険に何度もさらされた。たくさん家族が長く連なって、西へと向かう主要道路(コマンド(Komanda)ルート)を歩いた。市内に暮らす者にとって、森で生き延びる方法など想像もつかなかった。最初の1週間は、避難生活に対する不安や危険に怯えながら過ごした。

1 ブニアから14km離れたチャイ(Chai)での攻撃

避難民によれば、5月21日の週末、通り沿いに潜んでいた男らの襲撃にあい、重火器や銃による発砲を受けたという。人々が混乱に陥るとそのグループは散り散りになって消えたが、現場には死傷者が残り、多くの家族が離れ離れになった。

「私たちは歩き始めたのですが、チャイの近くで武装兵士の襲撃にあいました。その時夫を亡くしました。彼は襲撃を逃れるため通りの反対側へ避難したのです。男性一人も心臓発作で亡くなりました。兵士らは通り沿いに潜み、私たちを銃で撃ってきました。多くの人々が死傷しました。当時一緒に行動していたのに、未だにここに到着していない者もいます。」

2 検問所での徹底した選別

民兵は通行を監視するためベニヘ向かう道路沿いに検問所を設けた。通行者は身分証明書の提示を求められ、「通行許可料」（例えば20人につき5ドル）を支払わされた。特定の部族出身であるために、「実験室」へ送られたり、道の反対側へ連れて行かれ他の避難民の目の前で殺害された人もいるという。

「ヘマ人は通過できませんでした。私の知り合いである母親と19歳の娘は、その場で殺害されました。」

「ある通りで、私たちがよく知っている少年4人が私たちの後方を歩いていました。彼らは息子の友人で、家にも度々遊びに来ていました。彼らの叫び声が聞こえました。斧で襲われたのです。」

「もし、他部族に属すると見なされれば、その場で連行され殺害されます。列に並んだ親子がそのように殺されるのを見ました。」

民兵はまず、拘留したいと思う者に出生地の記された身分証明書の提示を求める。身分証明書不携帯の場合、金銭を要求されたり、暴行をうけたりして報復の対象となった。その一方で、身分証明書の所持が必ずしも安全を保障するわけでもなかった。理屈では、身分証明書によって「好ましくない人物」の身元は明らかになるのだが、その他にも言語や身体的特徴も選別材料となった。

3 恐喝

避難民は、道中様々な手段で恐喝された。金銭や衣服、個人的な所持品などすべてがその対象となる。計画的な強盗以外に、例えば「規定に従い」グループの人数に応じた通行料の支払いを強

制されたり、辛うじて持ち出すことのできた僅かな所持品や、避難時から着ている衣類を取られたりした。

「避難する際、マットレスと衣類を持参しましたが、いずれも途中で盗まれました。私は靴まで捕られました。最初の検問所で全てを奪われ、他の検問所では殴られました。」

「ここに到着した頃には、下着とズボン1本しかありませんでした。残りは、検問所で奪われました。」

4 森を通過して避難

「私たちは市内に暮らしていたので、他の人を待ってから、一緒に森へ逃げようと思いました。私たちは道順も森の中で生き残る方法もわかりませんでした。」

ブニアからの避難民は、都市居住者である。数日歩いた後、森に逃げ込んだ。多くの場合は地面に直接、もしくは葉っぱの上で眠り、植物の根や野生の果物を食べ、沼の水を飲んだ。

「安全な場所へ行きたかったのですが、市内から逃げ出しました。私たちは、1ヵ月間、やぶの中や、その他眠れそうな場所ならどこでも床につきました。植物の根を食べたり、マラリアから身を守るためその汁を搾って使ったりしました。ときには他人の畑で食料を調達しました。」

「自分自身、今どこにいて、これからどこに行くのか見当もつきませんでした。最初、サバンナへ行きました。メドウを通り過ぎると道が途切れてしまったので、アシの間を歩き、水辺に出てから、山を登ったりしました…。私たちは屋外で寝起きしました。」

避難民は道中、助けを求めてお金を支払わなければならないこともあった。土地の人は、避難民の所持品や病人の運搬、ガイド、川を渡る手伝いなどを請け負った。

インタビューに応じた誰もが、途中で置き去りにされた病人や高齢者について語った。ある女性は避難中に子どもを生んだ。このように、たった1人で出産しなければならなかった女性が少なからずいた。なかには、出産後すぐに再び避難し始めた女性もいたという。

「骨盤を骨折して、家族から道端に置き去りにされた女性がいました。彼女は高齢でひとりぼっちでした。私たちは、自力で組み立てた担架で彼女を搬送しました。隣の村に辿り着くと、空家

になっていた民家に彼女を降ろしました。彼女はその日の朝、転んで骨を折ったところだったのです。」

結局、MONUC 部隊も暫定緊急軍も、ブニア市内のごく一部の地区以外では、真に住民の安全を確保することができなかったのである。

第3章 不十分な援助

6月にイトゥリ地方への「暫定緊急多国籍軍」の派遣が決定されたとき、この動きを、極めて激しい武力衝突に数週間にわたって苦しめられてきた人々を助けたいと国際社会が要望している証だと考える楽観的な人もいた。国連安保理決議第1484号はこの新たな派遣の目的を「人道的状況の改善」と定めているが、それから2ヵ月が経過した今も、ブニアと周辺地域の住民は生きるために必要な最低限の物資すら手に入れられないでいる。その原因が情勢不安にあることは確かだが、同時に、ニーズを予測することができず、適切な援助計画が立てられなかったことにも起因している。

第1節 ブニア：「帰還民」は後回し

暫定緊急軍の派遣に誘い寄せられて、戦闘により避難していた人々が、数週間で1万2千人以上ブニアに戻った。市周辺地域の住民で、ブニアに避難している人もいる。治安問題が山積する町で、彼らは生き抜くための手段を見つけようとしているが、食糧、飲料水、避難施設の不足は解消されていない。

つい先日避難民キャンプに到着した人々は、登録が済み、ようやく緊急配給物資(食糧、飲料水、食器、テントなどの資材)を受け取る資格を得るまでの数日間、援助を一切受けることなく過ごさなければならなかった。数週間も森で避難生活を送るあいだにすべてを失ってしまった彼らにとって、これらの物資の配給は生存に不可欠であるにもかかわらずである。

備蓄食糧が十分でないため、今日にいたるまで1日当たり700キロカロリーの食糧しか配られていない。これは成人の1日の必要栄養摂取量の3分の1にすぎない。物資面では、一時滞在所の人々に、3家族(およそ15人)に対し1枚の割り当てでプラスチックシートが7月中旬に配られたのみである。

「帰還民」の栄養状態が悪いため、MSFは集中栄養センターを開設した。全人口に対する定期的な食糧配給は、今日の喫緊の課題である。配給が遅々として進まない理由の1つには、世界食糧計画(WFP)が十分に補給・維持された輸送経路を確保していないことが挙げられる。また紛争の継続により陸路での輸送が困難になっているため、物資輸送能力も制限されたままである。

現在の避難民受け入れ状況—彼らの保護から食糧、衛生環境に関するまで—は、明らかに不適切である。もしブニアに戻る人々がこのまま増加すれば、状況は悲劇になる危険性を孕んでいる。この地方の風土病であるコレラや赤痢の患者が出ているだけにその懸念はなおさら深まる。

MSF チームからの報告

メドゥから空港のキャンプに着いた人々は何も持っておらず、3 家族に 1 枚の割り当てで防水シートを受け取るまで、2 日間を屋根付きの一時滞在所で過ごした。彼らは、調理器具と食糧(2 家族に対し 25kg のとうもろこし粉、1 家族に対し 1.5 本の油と 5kg の豆)の配給を受けることができた人々の一部である。家族ごとに石鹸 1 本も配られた。彼らは皆ブニア出身だが、ムジペラ、キンディア(Kindia)、ンゲシ(N'gesi)などの「危険な地区」には戻れないと言っている。「すべての地区に兵士が配備されない限り、家には戻れない。」

新たに到着した人たちは、一時滞在所(1 枚の防水シートを張ったもの)に入り、場所の割り当てと食糧配給の引き換え券の配布を待つ。この数日間で 150 以上の家族が到着した。彼らの健康状態はおしなべて悪い。怪我をして治療を受けないまま数週間が経ってしまった人や、皮膚感染症に罹った人がいる。少なくとも 2 日間は食べ物を口にしておらず、この数ヶ月間栄養不良状態にあることが多い。なおその上に、一切を失ってここに着いても、援助を受けるのに数日間も待たされる。

第 2 節 ブニア周辺：援助から忘れ去られた地域

治安上の問題のため、ブニア周辺の「グレーゾーン」で援助活動を行うことは今も不可能である。この地方で活動しているわずかな NGO²は、そこに入ることもできないし、彼らの力のみでは 10 万人を越す住民に援助を届けることは不可能である。街では毎週、ブニア郊外での新たな虐殺の話を目にするが、新たに避難民となった人や負傷した人が暴力を逃れて街にたどりつくことによってしばしばその話が裏付けられている。

第 3 節 ベニ：何ヶ月も予測に失敗した結果

6 月初めまでベニは比較的 안전한地域だったため、数ヶ月にわたって避難民がこの街に流れ込んでいた。半年前から 3 万人の避難民がベニで暮らしているにもかかわらず、その間食糧援助は一切実施されず、今回新たに 5 万 5 千人がブニアからベニに到着した後も、WFP が通常の半分の量の食糧配給を行うのに 3 週間以上かかった(配給は 6 月 8 日から 15 日にかけて行われた)。

² ICRC は、2001 年 4 月に職員 6 名が殺害されて以来、この地方では活動していない。

食糧が不足しているため、WFPは7月と8月にも不十分な量での配給しか計画していない。しかしそのような配給では、もっとも弱い立場にあると判断された人しか食糧を受け取ることはできない。

一般にこの種の「受給者限定」食糧配給は、部分的にでも自立が可能な人々に対して行われる。ほぼ例外なく持ち物を押収されたり略奪されたりして、やっとのことでキャンプにたどり着いた人々は、明らかにこのケースにはあてはまらない。ましてや戦争による荒廃で、働き口はほとんどなく、物価が高い地域においてはなおさらである。

7月中旬にワールド・ビジョンが避難民に対して行った簡易調査により、重度の栄養障害はそれほど深刻化していない一方で、栄養不良に陥る危険がある子どもは多数いることがわかった。MSFは現状がさらに悪化することを避けるため、5才以下の避難民の子ども1万7千人に対して3ヵ月間栄養補給を行うための300トンの食糧を準備した。

2003年7月半ばの時点でも、イトゥリ地方の紛争の犠牲者に対する救援物資は十分でない。

この危機への国際社会の関与は、援助物資に関してもほとんど意味を成していない。国連機関の存在は物資面でも人員面でも過少であり、援助業務を支えるはずの諸機関からの支援金は不十分で、高まる一方の需要に応えることはできていない。

結論

残念なことに、イトゥリ地方に駐留する2つの多国籍軍(MONUCと暫定緊急多国籍軍)には、真に住民を保護する能力がないことが明らかになってしまった。活動はブニアのみに限定されるという権限で派遣されているため、暫定緊急軍はブニア郊外に今も留まっている数千人の命運を顧慮したりはしない。ブニアで活動しているわずかな人道援助団体も、この数ヶ月間彼らのもとへ行くことはできないでいる。MSFは、そういった郊外に留まっている人々の境遇をとりわけ懸念している。

国連安保理がイトゥリ地方のMONUCを増強すべきか決断するときに来ているが、国連平和維持軍は過去において何度も、住民の保護という任務を果たせなかったことを想起すべきである。ボスニアでもルワンダでも、その失敗は数千人の人々の死という結果に終わったのである。

MSFはこれらの痛ましい過去の証人として、イトゥリ地方の住民に保護の危険な幻想を与えることがふたたびないように、国際社会に対し強く要請する。

MSFは国連安保理に対し、イトゥリ地方における多国籍軍の権限や形態がいかなるものになると、住民を保護するという自らの約束を十全に守るよう、そして過去にスレブレニツァの「安全地帯」の悲劇で示されたように、政治的目的のために住民を犠牲にすることがないように強く求める。

また、この地方で現在行われている援助活動は極めて不十分であり、需要に応えることができていない。イトゥリ地方の紛争の犠牲になっている住民への人道援助を実質的に増大させるためには、国連機関やその他の援助機関の行動が不可欠である。

付録：コンゴ紛争と国際社会

コンゴでは、数年前よりさまざまな政治的・軍事的勢力の間の紛争が広い範囲で繰り広げられ、多数の人命を奪い続けている。国際社会は、種々の外交的・軍事的手段を用いてこの危機に対処してきたが、その努力は、この紛争の激しさ、それによってコンゴの人々にもたらされた数々の悲劇に見合うものではなかった。1997 年以来この紛争のために 200 万人の死者が出たという事実は、この紛争から市民を守ろうという国際社会の努力がいかに不十分であったかの証左である。

コンゴの近隣諸国のほとんどがこの紛争の影響を受けている。コンゴ人難民を受け入れている国もあれば、ウガンダやルワンダのように、自国の政治的・領土的・経済的、または安全保障上の利益を守るという名目で、多かれ少なかれ直接的に紛争そのものやその解決に介入している国もある。

コンゴと国境を接していないアフリカ諸国のなかにも、1997 年以来、国際的調停者という名目で、もしくは二国間同盟を理由に介入してきた国もある。

アフリカ諸国政府の試みに続いて、米国、英国、フランスを含む欧米諸国が 1 年前より、コンゴの和平プランの構築に力を貸してきた。

国連への追加資金提供の実現は、これら諸外国の多かれ少なかれ計算づくの利害の復活に附随するものである。プレトリア会議やサン・シティ会議に対しても、外国政府から援助が提供された。国連は 2003 年、5 億ドルの予算と、市民保護のため、名目上は 8,700 人の兵力(実際に配備されているのはそのうち 5,500 人)を有している。

地図

